

ベンガルのバウルの文化人類学的研究(4)

村 瀬 智

要 旨

本研究は、インド・ベンガル地方の「バウル」とよばれる宗教的芸能集団の民族誌である。

詩人タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941) が、20世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風変わりな歌」とみなされていたバウルの歌が再評価されるようになった。タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によって膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきの立派な歌集として出版された。また、バウルの歌を分析し、バウルの宗教を考察した専門書もいくつか出版された。もちろんこれらの研究は、バウルについてのわれわれの理解におおいに貢献したのであるが、そこには「人間としてのバウル」を専門的に紹介しようとした民族誌的文献は、事実上、皆無である。本研究は、バウルの民族誌的記述と分析を通じて、カースト制度と表裏の関係にある世捨ての制度を考察し、インド文明の構造的理解を試みようとするものである。

キーワード：カースト、カースト制度、世捨て、マドゥコリ、ベンガル、バウル

目次

- I. 序論
- II. ベンガルのバウル：民族誌的記述
 - 1. バウルの道
 - 2. もうひとつのライフスタイル
 - 3. マドゥコリの生活
 - 4. 人間関係

5. 宗教生活

6. ベンガル社会の近代化とバウル

Ⅲ. 考察：世捨ての文化的意味

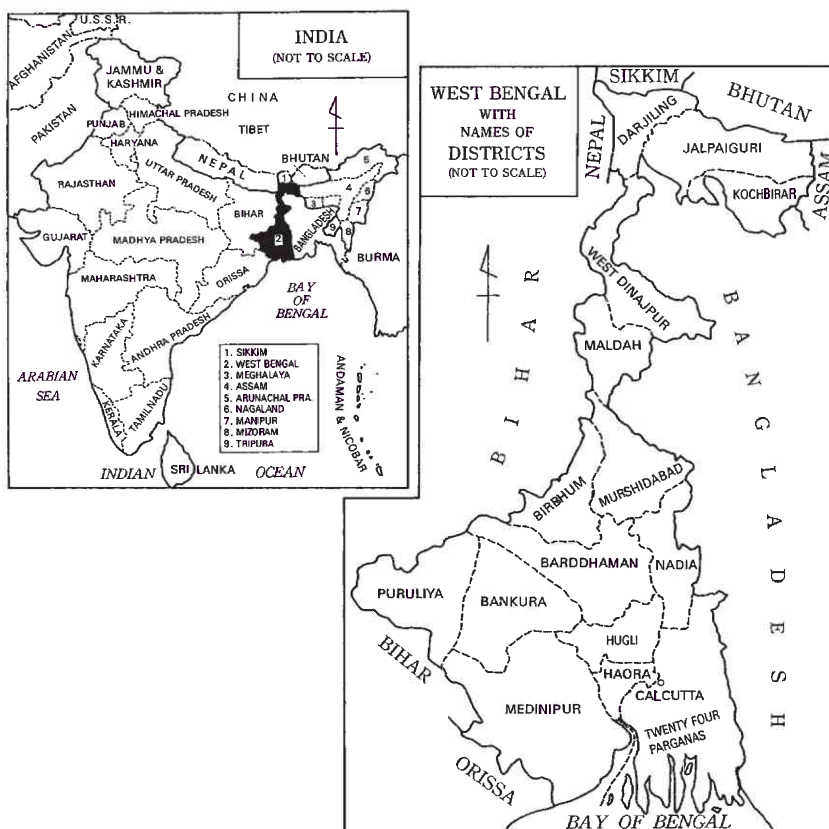
Ⅳ. 結論

本稿の前書き

本稿は、『大手前大学社会文化学部論集』第6号、『大手前大学論集』第8号および第9号に掲載された拙稿〔村瀬 2006: 331-349〕〔村瀬 2008: 171-188〕〔村瀬 2009: 253-275〕のつづきである。本研究「ベンガルのバウルの文化人類学的研究」は、一連の研究であるので、前稿もあわせて読んでいただきたい。

注および参考文献は、本稿に該当する分のみを提示する。

読者の便宜のために、地図は本稿にも提示する。



地図1：インドおよび西ベンガル州

出典：Tourist Map of Bengal

II. ベンガルのパウル：民族誌的記述（つづき）

5. 宗教生活

5-1. はじめに

パウルの宗教は、ベンガルのヴィシュヌ派（チョイトンノ派）の思想やタントリズムの流れを汲むサハジヤー派の思想、ヨーガの修行法、イスラム神秘主義など、いくつもの宗教的伝統の影響を受けている。しかし、パウルの宗教の核心的な部分は、「サードナ」（成就法）とよばれる宗教儀礼の実践にある。このパウルのサードナには、ヨーガの坐法や呼吸法を通じておこなわれる性的儀礼や、宇宙を構成する五粗大元素（地・水・火・風・空）を人間の器官や分泌物にたとえておこなわれる儀礼などをともなう。そして、サードナに関する事からは、もっぱらグル（導師）から弟子へ、こっそりと伝えられるのである。

パウルの宗教はパウルの歌に表現されている。しかしパウルの宗教には秘密の事がおおいので、その秘密をうたいこんだパウルの歌には、しばしば「なぞめいた用語」（サンダー・バーシャー）¹⁾が使用されている。つまりパウルの歌には、表面上の意味の奥ふかくに隠された「真の意味」を表現するために、暗号のような語句や表現が意図的に使用されているのである。このためパウルの歌は部外者にとっては難解で、いくつもの解釈が可能であったり、あるいは意味不明のことがおおい。その反面、部内者には「なぞ解き」をするようなおもしろさがあるといわれる。

ときどき夕方などに、グルのアーシュラムに弟子たちが集まってくることもある。そこでもサードナについて議論されることがあるが、それは主としてパウルの歌の解釈を通じてである。彼らはパウルの歌をうたい、パウルの歌の「なぞ解き」を楽しんでいるのである。しかし、歌の「真の意味」は秘密とされ、議論はグルとその弟子たちのあいだにかぎられる。そして彼らは、秘密の事に関しては、用心ぶかく慎重に発言するようにと、戒められているのである。

パウルの宗教儀礼は、かぎられたメンバーだけに知らされる秘儀である。このことと関連して、わたしがふたりのグルに弟子入りし一連の教えを受けたことと、秘儀とされる儀礼の記述について、ひと言述べておく必要があるだろう。

わたしのグルのひとり、バンクーラ県K村のSDBである。彼はライフヒストリーの語り手として、拙稿に登場した「いなかパウル」である [村瀬 2000: 62-75]。もうひとりのグルは、ビルブム県N村のGHDである。彼は、やはりライフヒストリーの語り

1) ベンガルの中世宗教詩における「なぞめいた用語」については、ダスグープタ [Dasgupta S.B. 1969: 413-424] を参照。またタントラ文献のそれについてはバーラティ [Bharati 1961: 261-270] を参照。

手として登場した「振り子行者」が、自分の「孫」と語ったバウルである [村瀬 1999: 119-125]。

「いなかバウル」は、今日、もっとも有名なバウルのひとりである。彼は、音楽的技量や宗教的知識に卓越したバウルとして、ほかのバウルから一目置かれている。わたしは、彼のライフヒストリーを聞くために、せっせと彼のアーシュラムに通っていた。1回の訪問に、4日ないし5日滞在するのが常だった。ライフヒストリーの「語り手」である彼と、「聞き手」であるわたしとの関係は良好だった。最初の訪問から数カ月が経過した。彼の話はいよいよ佳境に入ってきた。しかし、ある日突然、彼は「もうこれ以上インタビューに応ずることはできないので、今後アーシュラムに来ないでほしい」と、わたしに通告した。わたしは、何か失礼なことをしでかしたのではないかと心配した。しかし、そうではなかった。彼は、儀礼をふくめた宗教生活に話題がおよぶのをおそれたのである。バウルの宗教儀礼は、もっぱらグルから弟子へと伝承される事がらである。彼は、部外者であるわたしに、それを話すことができなかったのである。わたしは彼に、「あなたのお話をもっと聞きたいのですが、どうすれば可能ですか」とたずねた。彼はしばらく考え込んだあと、「グルと弟子の関係が成立すれば可能です。わたしはあなたを弟子にしましょう」とこたえた。こうして、わたしは「いなかバウル」の弟子になったのである。

わたしは、ビルブム県JK村の「振り子行者」とよばれる老バウルのライフヒストリーを聞くために、彼のアーシュラムに何度も通っていた。それは5度目か6度目の訪問のときだった。話題はバウルの師弟関係についてだった。彼の話が途切れ、しばらく間があった。そしてまた、ぼつりぼつりと語りはじめた。「グルと弟子の関係は、父と息子の関係とおなじです。その意味では、わたしには孫がひとりいます。・・・わたしの孫は健康で利発な子でした。その孫がすくすくと成長して、みごとなバウルになりました。・・・彼は本物のバウルになるように訓練されたので、並のバウルではとても彼に太刀打ちできません。わたし自身も、彼が物心つくころから、知っていることはなんでも教えました。・・・彼はまだ30代の若いバウルですが、彼こそわたしの後継者にふさわしい。わたしは、わたしに存在した責務のすべてを、今では彼にゆだねています。・・・もしご希望なら、彼を紹介しましょう」。もちろん、わたしは紹介してもらった。こうして、わたしは「振り子行者」の「ひ孫」になったのである。

「いなかバウル」と「孫バウル」のふたりは、たがいに面識がない。また、彼らのグルの系譜もことになっている。しかし、バウルの宗教儀礼に関するふたりの知識は、細部においては多少のちがいはあっても、大筋においては共通の内容をもっていた。

入門して間もなく、わたしはふたりのグルに、「バウルの文化人類学的研究の報告書には、宗教儀礼についての記述も不可欠なので、許される範囲で執筆したい」と、正直

に希望を述べ、許可を求めた。しかしながら、パウルの宗教儀礼の秘密性に関して、彼らはいくぶんちがった意見をもっていた。

「いなかバウル」は、「パウルの宗教儀礼は、もっぱらグルから弟子へと伝えられる事がらであり、部外者に対しては秘密を守らねばならない」と、慎重な意見を述べた。これに対し「孫バウル」は、「パウルの宗教はマヌシェル・ドルモ（人間の宗教）なので、興味のある人は、誰でもそれを知る権利がある」と、寛大な意見を述べた。そして、さらに語った。「あなたは、パウルの宗教儀礼のすべてを執筆してもよろしい。しかし、あなたにはそれができないでしょう。よく熟したマンゴーの味はあまりにおいしすぎて、それを食べたことがない人には言葉で説明できない。それと同じように、あなたは、あなたの経験したことを、それを経験したことの無い人には言葉で説明できない。しかし、あなたの読者の何人かがパウルの宗教に興味をもち、あなたのところにやってくるだろう。そのときには、彼らが望むことは、なんでも教えてあげなさい。もしあなたが教えるのに苦勞すると思うなら、その人たちをわたしに送りなさい。わたしが教えましょう」。

本稿の執筆に際して、わたしが見つけた解決策は、ふたりの言葉の組み合わせである。パウルの宗教儀礼に関する事がらで、誤解を受けるおそれのある儀礼については、わたしは執筆しない。しかし、わたしが執筆してもよいと判断した事がらについては、えん曲な表現ではなく、率直に記述しなければならないと思う。そのあと、もし誰かがわたしのところにきて本気で望むなら、わたしは、わたしが学んだことを直接伝達してもよいと思う。

5-2. 「人間の肉体は真理の容器」

詩人タゴールと、彼が創立したヴィシュヴァ・バーラティ大学の同僚のセンは、パウルの歌を採集し世に紹介したパイオニアである。タゴールとセンは、彼らの著作のなかで、とくにつぎの2点を強調した。まず第1に、バウルが追求する自由は、すべての外見的な強制からの自由である。したがってバウルは、人間を区別するカーストやカースト制度などをいっさい認めない。またバウルは、偶像崇拜や寺院礼拝などをいっさい行わない。そして第2に、バウルにとって、神はひとりひとりの人間の肉体に住んでいる。したがって、「心の人」（「モネル・マヌシュ」）が安置されている人間の肉体は、この世の中でもっとも神聖なものである [Tagore 1922, 1931] [Sen 1931, 1951, 1961]。「心の人」とは、バウルにとっての神、あるいは「人間の肉体の深い次元に潜む霊的本質」のことである²⁾。

タゴールとセンの影響により、その後、膨大な数のパウルの歌がベンガル人学者によって採集され、なかには注釈つきのりっぱな歌集として出版された³⁾。これら歌集の解

説や、歌にそえられた注釈をみると、タゴールとセンのバウルの歌や宗教についての解釈は、長い間、ほぼ定説として支持されていたようである。

しかし、ウペンドロナート・バッタチャルヤは、彼の500曲以上も集めたバウルの歌集の解説で、タゴールとセンの説に異議をとこなえた。彼は、バウルの宗教の特徴は秘密の教義とヨーガの実践を通じておこなわれる性的儀礼にある、と主張した。また彼は、バウルの宗教を形成している5つの要素として、(1) バウルの宗教の非ヴェーダの特色と、タントリズム⁴⁾などほかの非正統的な宗教との類似性、(2) 理想的人間の姿であり、神の本当の姿とみなされる導師(グル)に対する礼拝、(3) 神は人間の肉体に住んでいるというバウルの教義、(4) バウルの「心の人」という概念、そして(5) 人間の男女の本質は、クリシュナとラーダー⁵⁾、あるいはシヴァとシャクティ⁶⁾である、と指摘した [Bhattacharya, U. 1981: 291-368]。

いずれにせよ、バッタチャルヤの新説は、インド人研究者だけでなく、アメリカ人学者にも大きな影響を与えたようである。たとえば、バウル音楽の研究者キャプウエルは、バウルの歌を聞いたり読んだりするときには、タントリズムのもつ象徴性を心にとどめておく必要がある、と力説している [Capwell 1974: 255-264]。一方、一部の学者、とくに東ベンガル出身の研究者は、バウルの歌に頻繁にでてくるイスラム用語に注目し、バウルに対するイスラムの影響を主張している。たとえば、カリムは、バウルの歌はイスラムの伝統、とくにスーフイズム(イスラム神秘主義)の伝統を通じて解釈されるべきだ、と主張している [Karim 1980: passim]。

このように、バウルがヒンドゥー教徒なのか、タントラ教徒なのか、あるいはスーフイー神秘主義者なのかという問題は、バウル研究者の間でしばしば論争となり、いまだに決着がついていない。しかしわたしは、この問題に決着をつける必要はないと考えている。なぜなら、バウルはそれらのうちのどれかでありうるし、それらすべてでもあ

2) バウルにとっての神、あるいは人間の肉体の深い次元に潜む霊的本質は、バウルの歌ではいくつもの言葉で表現されている。「モネル・マヌシュ」(心の人)はその代表的なもので、そのほかには「オドル・マヌシュ」(捉えられぬ人)、「シヨナル・マヌシュ」(黄金の人)、「オチン・パキ」(未知の鳥)などとよばれる。

3) バウルの歌の代表的な歌集については、[Mansur-Uddin 1942] [Bhattacharya, U. 1958, 1981] [Das and Mahapatra 1958] を参照。また、英訳歌集については、[Bhattacharya, D. 1969] を参照。

4) タントリズムは、宇宙の生成発展を男女の結合になぞらえ、大宇宙を人間という小宇宙に重ね合わせて理解する。ヒンドゥー・タントラによれば、宇宙は「精神」(静的原理)と「物質」(動的原理)からなる二元論にもとづいている。そこでは、男女の交合が、シヴァ神(男性的、受動的、超越的永遠の原理)とシャクティ女神(女性的、能動的、時間的原理)との創造的な結合にまで高められるという思想のもとに説かれている。

5) ラダーは、クリシュナ神の恋人になった牧女で、牛飼いの女の総称「ゴビー」の代表格。

6) シャクティは、サンスクリット語で普通名詞としては「力」「能力」を意味する。しかし、この語が女性名詞でもあるので、シヴァ、ヴィシュヌなどの最高神の「性力」「女性原理」として考えられ、ときに固有名詞としてパールヴァティー、ドゥルガー、カーリーなど、本質は一人だがおおくの名前でよばれるシヴァ神の配偶神と同一視される。

りうるし、また、それらのどれでもないこともありうるからである。

パウルの歌は、その内容からみると、2種類に分類できる。第1は、「ショブド・ガン」とよばれ、主として娯楽のためにつくられた「ことば遊びの歌」である。第2は、「トット・ガン (タットヴァ・ガン)」とよばれる歌で、パウルの「宗教や儀礼にもとづいた歌」である。パウル研究者は、彼らの主張に関係なく、パウルの歌をテキストとして使用してきた。そして研究者は、当然のことながら「トット・ガン」に焦点をあて、パウルの宗教を分析してきたわけである。それにもかかわらず存在する研究者間の主張のちがいは、彼らが、それぞれ異なったセットのパウルについて議論していることに起因するように思われる。

このように、パウルの宗教にはいくつもの宗教的伝統が流れ込んでいる。しかし、パウルの宗教の核心的な部分は、「サードナ」とよばれる宗教儀礼の実践にある。そしてこの実践的なサードナのすべては、「人間の肉体は、真理の容器」という信仰にもとづいている。これは、すべてのパウルに共通の信仰であり、パウルの宗教のもっとも重要な部分である。パウルは、この信仰のことを「デホ・トット」⁷⁾(デーハ・タットヴァ)とよんでいる。しかし、この「デホ・トット」は、インドでは、多くのタントラ派やヨーガ派、それにイスラム神秘主義者にも広く受け入れられている信仰なのである。⁸⁾パウルの宗教が独特なのは、この信仰にもとづいたパウルの「サードナ」を、ユニークに展開させていることにある。

パウルはこの「デホ・トット」を、「ジャー・ナイ・バンデ、ター・ナイ・ブラフマンデ」と説明する。「バンデ」と「ブラフマンデ」は、それぞれ「バンダ」と「ブラフマンダ」の目的格である。「ブラフマンダ」というのは、「宇宙」のことであり、宇宙の「真理」のことであり、宇宙の真理としての「神」ことである。「バンダ」というのは、「容器」のことであり、万有の容器としての人間の「肉体」のことである。直訳すると、「この肉体にないものは、この宇宙にはない」ということである。逆もまた真なりで、「この宇宙にあるものは、この肉体にすべてある」となる。

この信仰をもう少し整理すると、ふたつの原理に分解できる。(1) 人間の肉体は、宇宙にあるひとつの「もの」であるだけでなく、宇宙の「縮図」である。(2) 人間の肉体は、神の「住処 (すみか)」であるばかりでなく、神を実感するための唯一の「媒介物」である。つまりパウルは、人間の肉体を小宇宙とみなし、みずからの肉体に宿る神と合一するために、みずからの肉体を駆使してサードナを実践するのである。

ここで、後の議論の準備もかねて、この「デホ・トット」について簡単にふれておき

7) ベンガル語の辞書は、「デホ・トット」を“the doctrine that the body is the seat of all truths.”と説明している。

8) たとえば、ダスグープタ [Dasgupta, S. B. 1956: 291-299] を参照。

たい。

わたしは、フィールド・ワーク中、おおくのバウルから、人間の肉体には神が住んでいるばかりでなく、そこには宇宙を構成する五粗大元素、すなわち「地」「水」「火」「風」「空」が存在すると、なんども聞かされた。固体は「地」によって象徴され、液体は「水」によって、白熱体は「火」によって、気体は「風」によって象徴される。「風」が「空気（気体）」に対応し、「空」が「エーテル」に対応する。しかし化学的なエーテルではなく、古代人が想像した、霊気みなぎる「天空上層の空間」をさす。

人間は、肉体というフレームに、宇宙のミクロな一面を秘めている、と考えられている。つまり、人間の肉体のなかに、小宇宙をなす、感覚器官では捉えられない、幻想的な「微細な身体」が存在すると信じられているのである。バウルは、この微細な身体を「シュッコ・デホ」⁹⁾（スークシマ・デーハ）とよんでいる。このシュッコ・デホには、「プラーナ」（宇宙の生气）が流通する「経路（管）」が数万本あるという。それらの経路のなかでもっと重要なのが、脊柱の中を通ずる管の「スシムナー」であり、これを軸として右に「イダー」、左に「ピンガラー」が、並行または絡みついているとされる。そして、しばしば「スシムナー」が脊髄に、「イダー」と「ピンガラー」が交感神経に比定されるが、幻想的な微細な身体であるから、現実の「脊髄神経」や「交感神経」と同一視すべきではない。

バウルは、人間の肉体には、脊柱基底部分から頭頂部に沿って垂直に配列された7つの「チャクラ」、すなわち生命のエネルギーの集積する「輪」が並んでいると信じている。それらのチャクラは、スシムナーによってつながっている。またチャクラは、「ハスの花」で表現され、それぞれ異なる数と色の花びらをもっている。さらに、下部の5つのチャクラは、それぞれ宇宙を構成する五粗大元素の存在する場所とされる。バウルは、それらのチャクラの形態や色彩、位置について、タントリズムからアイデアを借用しているようである。

ヒンドゥー・タントラによれば、7つのチャクラとハスの花びらの数、色、対応する元素、そしてその位置はつぎのとおりである。（1）4枚の花びらのムーラーダーラ・チャクラ（「根底を支える輪」の意）には、黄色の固体「地」が存在。位置は骨盤の基底部分、すなわち会陰部。このチャクラは、生命の力「クンダリーニ」（とぐろを巻いている蛇）が眠っている場所とされる。（2）6枚の花びらのスヴァディシュターナ・チャクラには、白い液体「水」が存在。位置は生殖器付近。（3）10枚の花びらのマニプーラ・チャクラには、赤い光熱体「火」が存在。位置は臍（へそ）付近。（4）12枚

9) ベンガル語の辞書は、「シュッコ・デホ」を“a body not perceptible by senses; an astral body”と説明している。

の花びらのアナーハタ・チャクラには、緑色の気体「風」が存在。位置は心臓付近。(5) 16枚の花びらのヴィシュッダ・チャクラには、灰色のエーテル「空」が存在。位置は喉(のど)。(6) 2枚の花びらのアージュニャー・チャクラの色は純白。位置は額の中央、すなわち眉間(みけん)。(7) 千枚の花びらのサハスラーラ・チャクラの色は、太陽の輝く色。位置は頭頂部である[Rawson 1973: 7-30][Woodroffe 1980: 50-58]。

もちろん、個々のバウルのそれらの知識は、必ずしも正確ではない。しかし、原理は同じである。宇宙の構造の両極が天国と地獄であるように、チャクラの相対的な位置と役割は、その両極にみるることができる。最下部のチャクラは、生命の根源的な力(シャクティ)が湧きあがってくる場所であり、完全に性的行為に関係している。それに対し、最上部のチャクラは、純粹に形而上学的な存在レベルに関わっている。チャクラやアシムナー管のおかげで、頭部にいるとされる神は最下部にまで下りてくることができる。そして、最下部に下りてきた神が、ふたたび最上部にまで上昇できる。そのことが重要なのである。これについては、あとで詳しく述べることになる。

5-3. 性的エネルギーの制御

世俗のヒンドゥー教徒にとって、「ダルマ」(社会的規範)を遵守すること、「アルタ」(実利)を追求すること、そして「カーマ」(愛、とりわけ男女間の性愛)を交歓することが、人生の三大目的とされ、この三つを充足しつつ家庭をいとなみ、子孫をのこすのがひとつの理想とされてきた。また一方では、とくに業・輪廻の思想が明示されたウパニシャッド思想以降、世俗の世界を放棄し、乞食遊行しつつ苦行や瞑想によって輪廻から脱却すること、すなわち「モークシャ」(解脱)を達成することが宗教の理想としてたてられた。

相反する実践を要請するこの二つの理想を、実践の時期を区分することによって合理的に調和させるために設定されたのが「四住期(アージュラマ)」の制度である。古代から現代にいたるインド人の大多数の生き方を方向づけるゾルレンとしての生き方、人間の理想として「まさになすべきこと」「まさにあるべきこと」、それが四住期という考え方に反映している。

バウルは、明らかに、「ダルマ」と「アルタ」を放棄している。彼らが主張するように、「バウルの道の第一歩は、マドゥコリの生活を採用すること」ならば、それはカーストの義務と富の追求の放棄を意味する。実際、バウルのライフスタイルは、貧困生活とカーストの義務からの自由を強調している。しかしながら、バウルにとって、「カーマ」は世捨てのもつ意味合いと矛盾するようにみえる。

バウルはマドゥコリの生活をしているが、彼らは「禁欲主義者」ではない。バウルは、ヨーガの坐法や呼吸法の有効性を認めるけれど、インドの出家修行者がしばしば主張す

る「苦行や禁欲」を「シュコノ・ポト」(パサパサした道) といつて否定する。そして、自分たちのバウルの道を、「ロシク・ポト」(みずみずしい道) とよぶ。しかし、バウルは「快楽主義者」ではない。むしろ、「カーマ」の危険性も十分に認識している。バウルは、出家修行者が主張する「性欲は、感覚的な喜びのもっとも強い形であり、人が性的充足の必要性を感じたとき、ほかのすべての欲望に対する自制が失われる」という意見に同意する。だからこそ、バウルは、「ブロムホチョルジョ (梵 プラフマチャルヤ)」を、たいへん重要視するのである。

「ブロムホチョルジョ」とは、一般的な用法では、バラモン教徒が生涯に経過すべきものとして『マヌ法典』が規定する4つの「住期」(アーシュラマ) の、最初の「学生期」をさす。これによると、バラモン教徒すなわちシュードラを除く上位のヴァルナ(バラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ) は、師のもとでヴェーダ聖典を読誦し、祭式の施行法を学ぶ「学生期」、結婚して男児をもうけるとともに、家庭内の祭式を主宰する「家住期」、息子に家を託して森林に隠棲する「林棲期」、そして諸国を遍歴し托鉢のみによって生活する「遊行期」の4段階を順次に経るものとされ、各段階に厳格な義務が定められている。¹⁰⁾

しかし、「ブロムホチョルジョ」とは、ここではバウルの用法にしたがって、「性的エネルギーの制御」あるいは「精液の保有」のことをさすことにする。それでは、「みずみずしい道」の信奉者であるバウルによって実践されている「ブロムホチョルジョ」とは、どのような方法とテクニックなのだろうか。

ベンガルのヴィシシュヌ派は、「カーマ」と「プレーマ」を、はっきりと区別している。どちらも「愛」に関することなのであるが、彼らによれば、「カーマ」は自分を満足させたいという欲望であり、「プレーマ」はクリシュナを満足させたいという欲望だとされる [Dimock 1966: 162-163]。

バウルもまた、この区別を認めている。しかしそれは、バウルが「カーマ」を否定しているという意味ではない。「みずみずしい道」を選んだバウルのブロムホチョルジョの方法は、「カーマ」を「プレーマ」に変化させる方法である。まさにミルクからギー(精製バター)を抽出するように、バウルは、「カーマ」を精製したものが「プレーマ」だ、と考えているようである。そして、ミルクなしにはギーを作れないように、「プレーマ」は「カーマ」の存在なしには得ることができない、と思っているようである。「人は性欲に支配されている」ということを、バウルは認めている。しかし彼らは、「カーマ」が、それが最終だとみなされたときに、たいへん危険なものとなる、とも

10) ただ、この四住期の制度が実際にどこまで忠実に履行されたかは疑わしく、現在では、特殊なバラモン階級をのぞき、家住期のみが実践されている。

思っているようだ。真理は、「カーマ」は始まりなのだ。「カーマ」は、「プレーマ」に変質されなければならないのである。

パウルのプロムホチョルジョの方法は、インド古来からの観念にもとづいているようである。インドでは、精液は簡単には製造されないのだと信じられてきた。一滴の精液を製造するのに、40滴の血液と40日の時間が必要といわれている [Carstairs 1961: 83]。パウルは、「精液は保有されねばならない。なぜなら、精液のむだづかいは、精神的なパワーの損失につながる」と主張する。彼らはさらに、「射精はこの世の苦しみの源であり、神の喪失を意味する」と主張する。パウルは、「射精は子孫をもたらし、人を現象世界と輪廻に束縛する」と思っているようである。伝統的なヒンドゥー教では、「モークシャ」(解脱)の究極的な目的は、この俗世界から脱して自由になることであり、輪廻から解放されることである。もちろんパウルは、ヒンドゥー教の出家修行者がしばしば好む、抽象的な哲学概念の議論には深入りしない。しかし、パウルは、射精をしないことによって「モークシャ」への道を察知し、そのことが、パウルの道のゴールに到達する「かぎ」だ、と信じているようである。このことは、わたしが採集した歌に見いだされる。

爺ちゃんが婆ちゃんのひざの上で死んだ日に
 ちょうどその日に父ちゃんが生まれた
 おいらが16になった日に
 ちょうどその日に母ちゃんが生まれた
 ちょいと頭をひねってみな
 ちょうどその日に母ちゃんが生まれたことを
 額から一滴、あふれる川にしたたり落ちた
 ちょうどその日に漁師が川に
 マーヤーの網でわなを仕掛けた¹¹⁾

この歌も、「なぞめいた用語」(サンダー・バーシャー)に満ちている。

『チャラカ・サンヒター』などインドの古典医学書では、生命の誕生は、「精液」と「月経血」の結合の結果であるとされている¹²⁾。そして、精液は「額」に貯蔵されていると信じられている。

「額から一滴、したたり落ちた」は、「射精」を意味する。女性生殖器の「膣」は、

11) 作者不明。歌手は、Sanatan Das Baul。1987年12月27日、シャンティニケータンで録音。

12) たとえば、ダスグープタ [Dasgupta, S.N. 1988: 302-312] を参照。

しばしば「川」にたとえられる。「あふれる川」は「月経中の膣」と解釈できる。「爺ちゃんが死んだ日」は「祖父が射精した日」と解釈できる。「おいらが16になった日」は、「父が16になった日」と解釈できる。なぜなら、「わたし」は、父の精液のおかげで生まれ、父の精液は父が生まれて以来、彼の額に貯蔵されていたからである。「ちょうどその日に母ちゃんが生まれた」は、「母に初潮が始まり、子を産める年齢の女性になった日」と解釈できる。したがって、「ちょうどその日に母ちゃんが生まれた」は、「その日に母が妊娠した」、つまり「わたしもまたその日に生まれた」と解釈できる。

「マーヤー」はふつう「幻」「幻力」などと訳される。ベーダンタ哲学では、現象世界は、真の実在に対して単なる幻にすぎないとされる。いずれにせよ、この世のうつろいやすさを示す概念であり、人を現象世界と輪廻に束縛する力と考えられた。

バウルはさらに、男性は本質的にパワーの損失を被りやすい、と考えているようである。彼らによれば、精液はつねに尿や汗などの分泌物として体外ににじみでているとされる。その反対に、子を産める年齢にある女性は、無尽蔵のパワー（シャクティ）の持ち主だとされる。本質的にパワーの損失を被りやすい「男性」は、無尽蔵のパワーの持ち主である「女性」から、パワーの補充を受けねばならない。そのためには、ひと組の男女で営まれる「ジュガル・サードナ」が必要である。しかし、「ジュガル・サードナ」で男性が射精をしてしまったら、本来の目的がそこなわれてしまう。そこで、「性的エネルギーの制御」あるいは「精液の保有」を意味する「プロムホ Cholジョ」が重要となる。つまり、「ジュガル・サードナ」を首尾よく実行するために、ヨーガの修行を通じてみずからを鍛えなければならないのである。しかし、射精をともなわずに「ジュガル・サードナ」を実践するのは、たいへん難しいものとされている。このためバウルは、弟子を導くグルの重要性、とくに宗教的トレーナーの役割を果たす「シッカ・グル」の重要性を力説するのである。

わたしは、フィールド・ワーク中に、「バウルというのは男であり、また同時に女である」ということを、しばしば聞かされた。このなぞめいた定義は、彼らのプロムホ Cholジョの別の側面を示している。つまり、もし男が女になったら、おそらく彼は、女性の肉体を欲望の対象とは思わなくなるだろう、ということである。

さきに述べたように、バウルという語は、牛飼いのゴピーがクリシュナに恋をしたように、「神に恋をして狂気になった人」という意味で使われはじめている。パウルの神に対する理想的な宗教的態度は、牛飼いのゴピーのクリシュナに対するそれのようなものと考えられている。この宗教的態度を、ベンガルのヴィシュヌ派は、「ゴピー・バーヴァ」よんでいる [Dimock 1968: 43-49]。バウルはこれを、文字どおりに解釈し、ゴピーを見習っているのだ。クリシュナの笛の音を聞くと、ゴピーたちはその甘い音色に夫も子どもも忘れて、クリシュナと踊りにやってくるといわれる。バウルも神に恋を

して何もかも忘れてしまった。彼は、今やゴピーだ。ゴピーにとって、クリシュナがこの宇宙で唯一の男性だった、という意味で、彼は神に対して女性なのだ。彼は、彼自身のことを、そう思わなければならないのである。「ゴピー・バーヴァ」は、性関係において、彼の男性原理を無効にする。パウルが神に対して女性になったとき、「カーマ」はもはや存在しない。パウルは、彼自身を満足させるために女性を望むことはできない。なぜなら、彼はもはや男性ではないからだ。つまり、「カーマ」から「プレーマ」への変化は、「男性」から「女性」への変化なのである。

5-4. 「つぎはぎジャケット」と「ふんどし」

議論の最終部分に入る前に、ちょっと寄り道をしよう。わたしは、ベンガルのパウルは、「パウルの道」を歩む人たちだと述べた。パウルは、みずからパウルと名のり、パウルの衣装を着て、人家の門口でパウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金もらって生活している。そして、このライフスタイルを象徴するパウルの衣装は、パウルをほかのベンガル人から区別し、はっきりと目立つ存在にしている。それならば、パウルの衣装は、「マドゥコリの生活に始まり、神との合一に至る」という「パウルの道」を象徴しているはずである。

ここでは、パウルの衣装の多数の品目のなかから2点にしぼって、手短かに述べたい。第1点目は、「グドゥリ」とよばれる「つぎはぎジャケット」である。わたしはジャケットといったが、これはジャケットである必要はない。ベストであってもコートであってもよいのである。要するに、「パッチワークの上着」であれば「グドゥリ」である。そして第2点目は、「ドリ・コウピン」とよばれる「ふんどし」である。

パウルは、彼らの衣装について決まったルールをもっているわけではない。しかし、彼らの間では、「パウルの衣装」について暗黙の了解があるようである。ひと口でいうと、それは、ヒンドゥー教の出家の修行者「サードゥー」が着ているような、ゲルア色または白色の衣装を着る、ということである。世俗のヒンドゥー教徒は、サードゥーのような衣装を着たパウルを「ちらっと見て」、「ドルソンを得ている」のである。パウルも、サードゥーのような衣装を着て、世俗のヒンドゥー教徒に「ドルソンを与えている」のである。¹³⁾ マドゥコリの生活をするパウルは、「シャツを着て、ズボンと靴をはいて、腕時計をはめる」わけにはいかないのである。

「つぎはぎジャケット」の「グドゥリ」は、パウルのマドゥコリの生活のシンボルとして抜群である。これは、わたしが知るかぎり、ベンガルのパウルに特有のものである。年配のパウルによれば、パウルはこれを自分で作っていたようだ。「いなかパウル」は、

13) 「ドルソン現象」については、拙稿 [村瀬 2009: 265-267] を参照。

つぎのように語った。

「つぎはぎジャケットのことだから、グドゥリー一着に一抱えもの端切れが必要だ。わたしがそれを作ろうと思ったときはいつも、グドゥリーを作るので端切れがほしいと、わざわざ村人に頼まなければならなかった。そうしなければ、村人から端切れを集めるのは、ほとんど不可能だ。必要な材料を集めるのに、何日もかかった。いずれにせよ、わたしが新しいグドゥリーを見て、それは多くの人びとの親切によって実現したことを知るように、村人各人は、見覚えのある端切れをちらっと見て、わたしのグドゥリーに、何がしかの寄与をしたことに気づくだろう。そのことが重要なのだ」。

バウルは、基本的に村人の余剰物資に支えられている。村人にとって、端切れは、さしあたり必要のない余剰物資の典型である。それらは、ふだんは箱やトランクのなかにしまいこまれているものだ。一握りの米は確かにバウルの命を救う。しかし、一握りの米で、バウルの空腹を満たすことはできない。同じように、一片の端切れで、グドゥリー一着を作ることはできない。グドゥリーは、一軒一軒少しずつ物ごいをして歩く「マドゥコリ」という行動のシンボルであり、グドゥリーに縫い込まれた一片一片の端切れは、バウルと村人との「きずな」を確認するシンボルとなっているのである。

「ふんどし」を意味する「ドリ・コウピン」は合成語である。「コウピン」はふとももの間に回される細い帯状の布で、「ドリ」は腰の周りに回して結ばれる紐で、コウピンを正しい位置に固定する。ドリ・コウピンは、ヨーガの修行をする男性には便利なもので、インドでは、ヨギーやサードゥーに広く着用されている。なぜなら、その基本的機能は男性生殖器を支えることにあるからである。したがって、それは女性のヨーガ修行者(ヨギニー)には不必要なもので、もっぱら男性用のみである。

さきに、ベンガルのバウル派には、ふたつの基本的な通過儀礼が存在すると述べた。それらは、「特定のグルへの入門式」である「ディッカ」(ディークシャー)と、「世捨て人の身分への通過儀礼」である「ベック」である。ベックのときに、バウルはグルより、新しい「こつじきの鉢」と新しい「ドリ・コウピン」を受け取る。そしてこれ以後、ほかのバウルから「コウピン・ダリー」(ドリ・コウピンの着用者)とよばれるようになる。女性の「バウリニ」も、ベックを受けることができる。しかし、バウリニの場合、当然のことであるが、ドリ・コウピン授与のセレモニーは省略される。

ベンガルの世捨て人はバウルだけではない。また、世捨て人の身分への通過儀礼である「ベック」が存在するのも、バウル派だけではない。たとえば、ベンガルのヴィシュヌ派の男性の世捨て人「ボイラギ」もベックを受けた。そしてやはり、新しい「こつじきの鉢」と「ドリ・コウピン」を受け取った。そしてベックのあと、彼らは「ベク・ダリー」(こつじきの鉢の所有者)とよばれるようになるのである。ヴィシュヌ派の女性の世捨て人「ボイラギニ」もベックを受けた。しかし、やはり当然のことながら、ボイ

ラギニはドリ・コウピンを受け取らない [Kennedy 1925: 162-166]。

このように、バウルもボイラギも、「ベック」のときに同じものを受け取るのに、通過儀礼の違った側面が強調されている。つまり、バウルが「コウピン・ダリー」とよばれるようになるのに対し、ボイラギは「ベク・ダリー」とよばれるようになるのである。これはいったいどういうことなのであろうか。

ベンガルのヴィシュヌ派の場合、「ベック」は、実質的に世捨て人の身分への通過儀礼である。ボイラギは、「ベック」を受けた後に、実際にマドゥコリをして生活するようになるのである。したがって、世捨ての行為としての「マドゥコリ」を象徴する「こつじきの鉢」が、通過儀礼で強調されるのである。しかし、バウルの場合、そもそもはじめからマドゥコリをして生活していた。彼らが主張するように、バウルの道の第一歩は、カーストの義務を放棄し、マドゥコリの生活をするのである。バウルにとって、「ベック」で受け取る「こつじきの鉢」は、形式的なものである。それは、マドゥコリの生活を、これまでどおり続けるという確認にすぎない。バウルにとっては、「ベック」で受け取る「ドリ・コウピン」のほうが、より重要なのである。だからこそ、そのことが通過儀礼で強調されているのである。

その基本的な機能によって、「ドリ・コウピン」は、男性原理のシンボルであることは明らかである。さらに、宗教的に上級段階に達した男性バウルにのみ「ドリ・コウピン」の着用を許されるのである。したがってそれは、ヨーガの修行によって「性的エネルギーの制御」あるいは「精液の保有」を意味する「ブロムホチオルジョ」を成就した男性バウルのシンボルでもあるわけである。つまり、ベックは、バウルのサードナでもっともむずかしいとされる「ジュガル・サードナ」を実践できるようになった男性バウルの、「免許皆伝の通過儀礼」なのである。

バウルのブロムホチオルジョの方法のユニークな点は、「女になる」ということである。それでは男性と女性とでは、何が根本的に異なると考えられているのであろうか。これはベンガルだけでなく、広くインド中で一般に信じられていることであるが、男性としての人間の肉体は、「精液」を作り出す能力という点で、女性とは区別される。同様に、女性としての人間の肉体は、「月経血」を作り出す能力という点で、男性と区別される [Inden and Nicholas 1977: 52]。これが根本的な違いである。

わたしは、フィールド・ワーク中に、「バウルは男であり、同時に女である。だからドリ・コウピンが必要である」と、なんども聞かされた。「ドリ・コウピン」は、バウルの男性生殖器を支えるためだけでなく、彼の「女性性」をシンボライズするためにも使用されているのだ。つまり「ドリ・コウピン」は、バウルの宗教的態度「ゴビー・バーヴァ」のシンボルなのである。

ゴビーがクリシュナを愛したように、バウルは狂ったように神を愛する。「ドリ・コ

ウピン」を着用することによって、彼のプロムホ Chol ジョは安定し、揺るぎないものとなっている。彼はけっして「射精」をしない。同時に、「ドリ・コウピン」を着用することによって、彼は女になった。彼は、今やゴピーだ。彼はもはや「射精」ができない。結果として、彼は象徴的に「月経血」を流す。「ドリ・コウピン」は、彼の「生理ナプキン」なのである。

「女になる」ということは、バウルのプロムホ Chol ジョの方法やテクニックだけでなく、バウルの神に対する宗教的態度や、バウルのサードナの重大な側面を暗示している。サードナの実践を通じて、バウルは神と合一し、「ショホジ」(サハジャ)を実感する。「ショホジ」という語は、「本有的」「生得的」という意味である。ショホジを実感するとは、バウルが「心の人」(モネル・マヌシュ)とよぶ神と結ばれ、至福の喜びを経験し、「人間に本来的にそなわっている宇宙の根本原理」を実感することだ。これは、「バウルの道」のゴールである。その究極の目的を達成するために、バウルは女にならなければならない。なぜなら、「心の人」は、個々の人間にとって、この世で唯一の「男性」とみなされているからである。

それでは、バウルが「心の人」とよぶ神は、いったいどのような神なのであろうか。そして、バウルと「心の人」との関係は、どのように考えられているのだろうか。

5-5. 心の人

バウルにとって、「心の人」とは、個々の人間の肉体に住む「個人の神」である。それならば、人間は、この個人の神と、個人的な関係をもつことができることになる。となると、神のパーソナリティーと人間のパーソナリティーには、本質的な違いがないということになる。これは、われわれ人間のパーソナリティーである「自己」と、「真の自己」としてわれわれの肉体に住む神のパーソナリティーとの愛である。愛されるのは、われわれの肉体に住む「心の人」であり、愛するのは、まちがってこの神のパーソナリティーとは違ふとみなされている人間のパーソナリティーである。つまり、バウルのサードナは、「自己実現」(セルフリアリゼーション)の手段である。

バウルのサードナのもうひとつの側面は、ひと組みの男女によって営まれる、ということである。バウルは、人間の肉体は、宇宙の縮図であると考えている。また、和合はこの宇宙を統治する原理であり、宇宙の和合は、男女の和合によって象徴されると考えている。バウルのサードナの目的は、人間に本来的にそなわっている宇宙の根本原理を実感することであり、それは、男女の至福の結合によって得られるとされる。

セクシャリティーの神秘がバウルの神格を明らかにする。バウルによれば、神は、最初ひとりぼっちだったので、感覚的な喜びを味わうことができなかった。そして、彼はさびしい思いをしていた。そこで彼は、自分自身を半分に分割した。一方に「女性」の

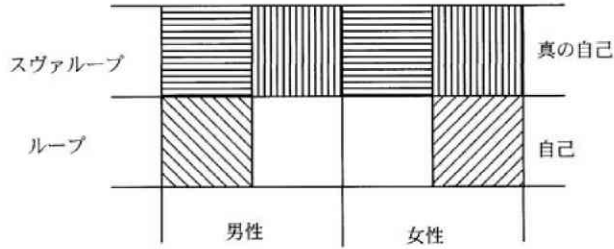
姿を創造し、他方には自分の「男性」性を残した。彼女の存在のおかげで、彼は性的結合に関するもっとも甘美な感情を味わうことができた。ここで重要な点は、神は男女両性を含んでいるということである。

バウルによれば、人間の男性は「プルシャ」とよばれ、人間の女性は「プラクリティ」とよばれる。しかし人間の肉体に住む神が、男性と女性の両方の側面から成り立っているように、個々の人間も、男性と女性を含んでいると考えられているようである。

先に述べたように、男性は精液を作り出す能力において女性と区別され、女性は月経血を作り出す能力において男性と違くとされる。男性の身体における「精液」の卓越のおかげで、彼は男性である。しかし、男性の体の、目に見える姿は男性であるが、そこには、いくらかの女性部分があるとされる。もっとも、彼のなかの女性部分は隠れていて見えない。同様に、女性の身体における「月経血」の卓越のおかげで、彼女は女性である。女性の体の主要な部分は女性であるが、その一部は男性なのである。ただし、女性の体には、男性の姿は隠れていて見えない。バウルは、人間というのは、その肉体の「性」が、一方、または別の一方の側面の優位性によって決定される「バイセクシュアル」な生物、と考えているようである。

バウルによれば、男性の身体では、精液は「額」に貯蔵されている。また月経血は、骨盤の基底部分にある「ムーラーダーラ・チャクラ」で、とぐろを巻いて眠っている「クンダリニー」として存在する。女性の身体では、精液は、あいまいに頭の中のどこかにあるとされている。

さらにバウルは、人間のもつふたつの相、「ループ」と「スヴァループ」について述べている。「ループ」というのは、「人間の男と女の目に見える姿」であり、「自己」のことである。「スヴァループ」というのは、「人間の肉体に住む神」であり、目に見えない「真の自己」のことである。神は、「自己」に対して「真の自己」であり、「ループ」に対して「スヴァループ」である。しかしバウルは、神も人間も両性を有すると考えている。このことは、人間の理解の範囲を超えたものかもしれない。次の「図2」は、この「バウルのループ・スヴァループ理論」を理解する手助けとなるだろう。








-  ブルシャ・スヴァループ=心の人
目に見えない「真の自己」の男性的側面
-  プラクリティ・スヴァループ
目に見えない「真の自己」の女性的側面
-  ループ=男と女の目に見える姿
-  男性の中の目に見えない女性部分
-  女性の中の目に見えない男性部分

図2：バウルのループ・スヴァループ理論

さて、「ループ」と「スヴァループ」に関連して、バウルの「心の人」について述べよう。バウルによると、「心の人」は、男性・女性にかかわらず、個人の「スヴァループ」である。「心の人」は、ふだんは額の2枚の花びらの「アージュニャー・チャクラ」にいとされる。しかし、1ヶ月に3日間、「心の人」は、愛の喜びを味わうために移動する。「心の人」は途中のチャクラを通過して、4枚の花びらの「ムーラーダーラ・チャクラ」へと、ゆっくりと下りてくるとされる。このことは、たくさんのバウルの歌に表現されている。たとえば、つぎの歌である。

わたしの二枚の花びらの、はすのお花に住みなさる
 そのお方が「心の人」よ
 そのお方がショホジの人だ、ということ
 おぬしはご存じないらしい
 十六枚と十枚の、はすの花びらくぐり抜け
 喜悅の川辺でゆらゆらなさる
 ひとつになるには、またとない好機

「心の人」がお引越し
四枚の花びら、はすの花
いつものところへいつものように
あのお方がやってくる¹⁴⁾

「心の人」がふだんとどまっている額の「アージュニャー・チャクラ」とは、「精液」が貯蔵されているとされる場所である。精液は男性原理の象徴である。したがって、「心の人」は、目に見えない「真の自己」の男性的側面（「プルシャ・スヴァループ」）である。さらに、1ヵ月に3日間、「心の人」は、脊柱基部の「ムーラーダーラ・チャクラ」へと下りてくる。そこは、女性原理「シャクティ」の一形態である「クンダリニー」がとぐろを巻いて眠っているところである。「ムーラーダーラ・チャクラ」での3日間が何を意味するかといえば、もう気づかれたと思う。そう、女性の月経期間だ。まさに、「心の人」が、「精液」に象徴され、目に見えない「真の自己」の男性的側面（「プルシャ・スヴァループ」）であったように、「月経血」は、目に見えない「真の自己」の女性的側面（「ブラクリティ・スヴァループ」）だ。生命の誕生が「精液」と「月経血」の結合の結果であるように、「プルシャ・スヴァループ」である「心の人」は、「ブラクリティ・スヴァループ」と結合せざるをえない。つまり、「月経血」は、女性の肉体に「心の人」が現われ、そこで「神聖なる愛の戯れ」（リラー）が始まったことを示すサインである。パウルは、女性の月経期間を、「モハー・ジョグ」（梵 マハー・ヨーガ）とよんでいる。モハー・ジョグとは、「最善の時」あるいは「偉大なる結合」¹⁵⁾という意味である。なぜなら、「心の人」が現われるのはこの時期だけだからだ。したがって、パウルが「心の人」と結ばれる可能性のあるのもこの時期だけだ。実際、パウルのもっとも重要な「サードナ」は、この時期に行われる。そして彼らは、このサードナを「月に三日のプジョ」（マシェ・ティン・ディン・プジョ）とよんでいる。

5-6. 神と人間

ダスグープタは、ベンガルのサハジヤー派の宗教における「アロプ」（梵 アーロパ）の概念について述べている。「アロプ」とは、「神の属性を人間に賦与すること」という意味である。ダスグープタによると、サハジヤー派のサードナの究極の目的を達成するためには、ひと組みの男女の修習者は、まず最初に、彼ら自身がクリシュナとラーダー

14) 作者は、Padmalochan。ウベンドロナート・バッタチャルヤの歌集、歌番号556番より [Bhattacharya, U. 1981: 946]。

15) 「モハー・ジョグ」の意味のひとつ「偉大なる結合」は、東京大学東洋文化研究所の永ノ尾信悟教授のご教示による。

そのものである、と思わなければならない。つまり、男性修習者の「真の自己」はクリシュナであり、女性修習者の「真の自己」はラーダーである、と考えなければならないのである [Dasgupta, S.B. 1969: 133-134]。バウルの宗教にも「アロプ」の概念が存在する。しかし、バウルが述べる「アロプ」は、サハジヤー派のそれよりも屈折したもののようである。なぜなら、バウルにとっては、神も人間も男性と女性の両方の側面をもっているからである。

バウルのサードナも、ひと組みの男女によって営まれる。しかし、バウルのサードナの目的は、「心の人」と結ばれ、「リラー」とよばれる「神聖な愛の戯れ」を経験し、宇宙の根本原理を実感することである。人間の肉体に住む「心の人」は、男性・女性にかかわらず、「プルシャ・スヴァループ」(目に見えない「真の自己」の男性的側面)である。バウルは、このきわめて心理的な試みを「ループ・スヴァループ・サードナ」とよぶ。ひと組みの男女によって「ループ・サードナ」を営みながら、それぞれは、あたかも彼／彼女自身が、彼／彼女の肉体に住む「心の人」、つまり「プルシャ・スヴァループ」と結ばれていると感じなければならない。そのためには、それぞれは、彼／彼女自身を「プラクリティ・スヴァループ」(目に見えない「真の自己」の女性的側面)に変化させなければならない。すべての人間は、男性と女性の両方の側面をもっているのので、それは理論的には可能である。しかし、どのようにして行うのであろうか。

女性の「バウリニ」にとって、彼女自身を「プラクリティ・スヴァループ」に変化させることは、それほど難しいことではなさそうだ。「心の人」は「プルシャ・スヴァループ」で、それは「精液」に象徴される。「プラクリティ・スヴァループ」は「月経血」に象徴される。バウリニは、今まさに月経期間中なので、「プラクリティ・スヴァループ」のシンボルである「月経血」は彼女の体に顕著に現われている。彼女は、「ループ・サードナ」のパートナーを見つめる。あたかも彼が、「月経血」を求めて彼女の頭の中のどこかから下りてきた彼女自身の「心の人」、つまり「プルシャ・スヴァループ」だと想起することにより、彼女自身を「プラクリティ・スヴァループ」に変化させることが可能であろう。さらに彼女は、彼女自身が彼女の体の中で行われている「神聖な愛の戯れ」(リラー)の参加者だ、と想像することができるであろう。

しかし、男性の「バウル」にとって、彼自身を「プラクリティ・スヴァループ」に変化させるのは、やっかいなことだと思われる。彼の「ループ」も「スヴァループ」も、男性と女性の両方を含んでいる。しかし、彼の目に見える姿(ループ)は男性だ。したがって、彼の実体は本質的に「精液」である。自然の法則により、彼の体に「月経血」を見ることは、とにかく物理的には不可能である。ここでわたしたちは、バウルの「女になる」という概念に直面する。

バウルは、サードナの究極の目的を果たすために、彼の「男性性」を中和し、彼自身

の内部で彼の「男性」と「女性」とのバランスを保たねばならない。彼は、彼の「男性の凝縮」とつり合わせるために、彼の「女性の凝縮」をよみがえらさねばならない。自己の内部に均衡を保つため、「完全体」を作るための相等的なふたつの「半分」が必要なのである。

「ドリ・コウピン」の秘密が、この問題に解決を与える。ドリ・コウピンは、ヨーガの修行によって「プロムホチョルジョ」を成就した男性バウルの「男性性」のシンボルである。しかし、バウルにとっては、それは彼の宗教的態度「ゴピー・バーヴァ」、つまり彼の「女性性」のシンボルでもある。ドリ・コウピンは彼の「生理ナプキン」なのだ。それを着用することによって、彼は象徴的に「月経血」を流すことができるのである。

「ループ・サードナ」を営みながら、バウルは、彼自身と彼のパートナーを同一視する。彼女は、今まさに月経期間中であるので、「月経血」は彼女の体にはっきりと現われている。ドリ・コウピンを着用しているので、彼もまた象徴的に「月経血」を流している。これは、結果として、彼の「プラクリティ・スヴァループ」、つまり彼の体でとぐろを巻いて眠っている「クンダリニー」を目覚めさせることになる。目覚めた「クンダリニー」を求めて、「心の人」つまり「プルシャ・スヴァループ」は、「アージュニャー・チャクラ」から「ムーラーダーラ・チャクラ」へ下りてくる。これは、彼の体の中で「神聖な愛の戯れ」が始まることを意味する。彼は、彼のパートナーを見つめながら、あたかも彼の「プラクリティ・スヴァループ」が鏡に反射しているかのように感じるのである。

バウルの「ループ・スヴァループ・サードナ」は、結局は、「自己」の「真の自己」への同化の過程である。「心の人」との愛の喜びのなかで、バウルはすべての感情や感覚を失う。そして彼は、「生の中の死」(ジャンテ・マラ)の状態を経験するといわれる。「孫バウル」が、「生の中の死」を次のように説明した。

「ループ・サードナ」のある瞬間以後、修習者は男女とも、「自己」の肉体的感覚や欲望を捨てさり、「死体」のようにふるまわねばならない。そうすることによって、彼らは真の「スヴァループ・サードナ」に成功するだろう。小さな川がガンガー(ガンジス川)に合流するとき、小川の水はその実体を失い、それはガンガーの水となる。「ループ」(「自己」)が「スヴァループ」(「真の自己」)と混じりあい、両者が同一のものとなったとき、「生の中の死」の状態を達成できる。

バウルの主張する「生の中の死」の状態は、人間の属性の解体と、人間そのものの消滅、つまり、人間の神への同化を暗示している。サードナの始まりでは、和合はまだひと組の男女(「ループ」)の間のことだった。修習者は精神集中とヨーガの坐法や呼吸法を利用して、みずからの「クンダリニー」を目覚めさせなければならない。今、「心の

人」が最下部のチャクラに下りてきた。さあ、「神聖な愛の戯れ」がはじまった。和合は「スヴァループ」の間のこととなった。そこにはもはや、神と人間との見せかけの区別も存在しない。人間を神と同等に置くことにより、男女の和合という生理学的な行為は、宇宙の特質と帰結を備えることになる。下位の五つのチャクラが、宇宙を構成する五粗大元素「地」「水」「火」「風」「空」にたとえられるとき、五つのチャクラは「心の人」と「クンダリニー」の上昇にともなって、宇宙の生成のプロセスをたどる。「地」は「水」に、「水」は「火」に吸収されるというように、下位のチャクラが上位のチャクラに同化して、ついに全チャクラが存在の根源に合一する。すなわち「シヨホジ」のありかに達する。このとき、個我は宇宙に合一するとされる。

パウルの「ループ・スヴァループ・サードナ」の究極の目的は、人間の肉体の深い次元に潜む「霊の本質」、あるいは人間に本来的にそなわっている「宇宙の原理」を実感することである。そのためには、修習者は「生の中の死」の状態を達成しなければならない。それは、「ループ」(「自己」)が「スヴァループ」(「真の自己」)と混じりあい、両者が同一のものになることである。これが「神の属性を人間に賦与すること」を意味する「アロプ」という概念の、もっとも重要な点である。これは、パウルがわれわれ人間の、その物理的、生物的、心理的様相のすべてを、存在論的見地から眺めていることを示している。そして、すべてが存在論的見地から理解されたとき、「人間の愛」は存在論的な重要性を獲得することであろう。

参考文献

Bharati, Agehananda

1961 'Intentional Language in the Tantra.' *Journal of the American Oriental Society*. 81: 261-270.

Bhattacharya, Upendranāth

1958 *Bānglār Bāul o Bāul Gān*. Calcutta: Orient Book Company.

1981 *Bānglār Bāul o Bāul Gān* (new edition). (『ベンガルのバウルとバウルの歌』) Calcutta: Orient Book Company.

Bhattacharya, Deben

1969 *The Mirror of the Sky*. London: George Allen & Unwin LTD.

Capwell, Charles H.

1974 'The Esoteric Beliefs of the Bauls of Bengal.' *Journal of Asian Studies*. 33(2): 255-264.

Carstairs, G. Morris

1961 *The Twice Born*. London: Hogarth Press.

Das, Matilal and Piyushkanti Mahapatra (eds.)

1958 *Lālan Gītikā*. (『ラロン・ファッキーラの詩歌』) Calcutta: University of Calcutta.

Dasgupta, Shashi Bhusan (S.B.)

1956 'Some Later Yogic Schools.' In Haridas Bhattacharya (ed.), *The Cultural Heritage of India*. Vol. 4, pp. 291-299. Calcutta: Ramakrishna Mission, Institute of Culture.

- 1969 *Obscure Religious Cults* (3rd ed.). Calcutta: Firma K. L. M.
- Dasgupta, Surendranath (S.N.)
 1988 *A History of Indian Philosophy* (reprint edition). Vol. II, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Dimock, Edward C., Jr.
 1966 *The Place of the Hidden Moon*. Chicago: The University of Chicago Press.
 1968 'Doctrine and Practice among the Vaishnavas of Bengal.' In Milton Singer (ed.), *Krishna: Myths, Rites, and Attitudes*. pp. 41-63. Chicago: The University of Chicago Press.
- Inden, Ronald B. and Ralph W. Nicholas
 1977 *Kinship in Bengali Culture*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Karim, Anwarul
 1980 *The Bauls of Bangladesh*. Kuchitua, Bangladesh: Lalan Academy.
- Kennedy, Melville T.
 1925 *The Chaitanya Movement*. Calcutta: Association Press.
- Mansur-Uddin, Muhammad (ed.)
 1942 *Hârâmani*. (『失われた宝石』) Calcutta: University of Calcutta.
- 村瀬 智
 1999 「バウル群像——ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究—— (1)」『大谷女子短期大学紀要』第43号、113-137頁。
 2000 「バウル群像——ベンガルのバウルのライフヒストリーの研究—— (2)」『大谷女子短期大学紀要』第44号、45-93頁。
 2006 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究 (1)」『大手前大学社会文化学部論集』第6号、331-349頁。
 2008 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究 (2)」『大手前大学論集』第8号、171-188頁。
 2009 「ベンガルのバウルの文化人類学的研究 (3)」『大手前大学論集』第9号、253-275頁。
- Rawson, Philip
 1973 *Tantra: The Indian Cult of Ecstasy*. London: Thames and Hudson LTD.
- Sen, Kshiti Mohan
 1931 'Baul Singers of Bengal.' Appendix 1 to Tagore's *The Religion of Man*. pp. 207-220. New York: Macmillan.
 1951 *Bânglâr Bâul*. (『ベンガルのバウル』) Calcutta: University of Calcutta.
 1961 *Hinduism*. Penguin Books.
- Tagore, Rabindranath
 1922 *Creative Unity*. London: Macmillan.
 1931 *The Religion of Man*. New York: Macmillan.
- Woodroffe, Sir John
 1980 *Introduction to Tantra Sastra* (7th ed.). Madras: Ganesh & Company.